

My Other Love

加藤文子

さいたま市のカフェギャラリーNでのペイント中心の展覧会は今年で六回を迎えた。はるか昔に一度、ドライオブジェで小さな展覧会をさせていただいたほかは、植物以外で依頼を受けたことはなかった。

ある時、植物を除いたもので、展覧会を考えてほしいとお話をいただいた。植物なくして一体何ができるだろう。

困る私に、オーナーのMさんは、原稿のために描いた植物スケッチがあるでしょう、と提案する。

額装もしていない拙いスケッチを土壁の重厚な空間に展示するのはどんなものか。

いらしてくださいと申す方々に申し訳ないような気もして、考えがまとまらない。

会期まで少し時間もあることだし、あまりむずかしく考えずやってみましょう、と促されて、とうとう承諾した。

内容はボンヤリしたままなのに、タイトルは浮かんだ。



バイオリン奏者、ステファン・グラッペリがジャズのスタンダードナンバーをピアノでレコーディングした名盤“My other Love”。晩年の作品だ。

誰が付けたのだろうか、とてもしゃれていると思った。

バイオリン同様、ピアノでも軽妙にスイングしている。

小説家で、ジャズ評論家でもあるナット・ヘントフはライナーノーツに、ロマンティックでチャーミング、リラククスして新鮮……と、形容。大絶賛である。

そんなグラッペリの世界にあこがれて、自然に降りてきた展覧会のタイトルが、My other Love だった。

本人が知ったら、顔をしかめるかもしれない。

第一回目は、植物スケッチ、木の実やドライの花を、ペイントしたアルミの容器に構成した作品などを展示した。

セッティングを終えて会場を見回した時のはずかしさは忘れることができない。

せっかくすばらしいタイトルを拝借したのに空間に圧倒されて淋しい。

内容とはうらはらに、はじめての試みということもあり、たくさんのご来場をいただいた。

複雑な気分のまま、会期は終わった。

搬出を終えようとした時、次は二年後に……と、声をかけていただいた。

これで最初で最後のつもりが、もう少しなんとかなるように、二年後に向けて考えてみよう、不思議とそんな気持ちがいっていた。

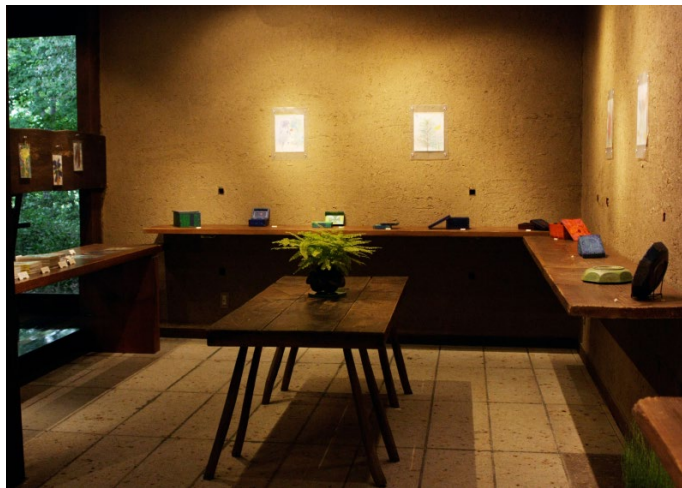
Mさんに言われると、その気になる、魔法にかかってしまう。

これで仕舞いになってもいいという思いを毎回持ちながらも、思いついたまま、描いて描いて描いているうちに、展覧会は回を重ねることになった。

出来はさておき描くことの工夫がこんなに楽しくなるなんて、思いもよらないこと。いつの頃からか、植物の仕事の合間におこなうライフワークになっている。

私が描けるのは植物が居てくれるから、イメージさせてくれるから……。

植物に育てられ、ギャラリーのMさんに導かれて、当初思い描くことのできなかった今日をいただいている。楽しいから、つづいている。今回はじめて、良くなったと、Mさんがほめてくれた。



カフェギャラリー温々での展示風景

Photo / Kato fumiko